新刊紹介

三願轉入の論理

文學博士　紀平正美著

「行の哲學」の著者として有名な紀平博士が「三願轉入の論理」を公にせられたのは昨年五月であつたが其の後昭和三年十月、改訂增補の上其の第五版が出版せらるゝことゝなつた。此の書が著者の從來公にせられた小論文を集輯せられたものであることは、「はしがき」を讀んでも明らかであるが、今度の改訂版には最後に「宗教の眞理性に就て」なる一論文が加はつてゐるので、內容がより一層豐富になつたわけである。

著者も既に「はしがき」に認めて居られる通り論理を專門的に研究せられる著者が親鸞上人の三願轉入に整然たる信仰の論理を發見せられたので、之を論述する目的を以つて出版せられたのが此の書であり、從つて三願轉入の論理といふ論文が第一に出てゐるのである。今目次に隨つて內容を一覽すれば次の如くなつてゐる。

第一　三願轉入の論理
第二　發菩提心
第三　深刻に自己に還らしめられて
第四　救濟の二方法
第五　行の哲學について
第六　信仰の心理及論理
第七　絕對他力
第八　言他力者如來本願力也
第九　哲學上より見たる親鸞
第十　自己意識の始終と宗教的態度
第十一　宗教の眞理性について

の十一論文が盛られてある。而して第一の三願轉入の論理から、第九哲學上より見たる親鸞までの九論文は親鸞上人の信仰の論理を研究せられたもので、第十自己意識の始終と宗教的態度は結論ともいふべきものである。

三願とは淨土眞宗の正依の聖典大無量壽經の第十八第十九第二十の三願のことで、親鸞上人は主著教行信證化身土卷に於て第十九願自力聖道の假門を出で、第二十願の念佛一途に歸入してゐたが今特に念佛の眞門を出でゝ第十八願の選擇本願の海に入つたと言つて居られる。之は親鸞上人の信仰の經過を示した信仰告白であるが、此の三願は皆菩薩の利他の働きを表明したもので貴いものではあるが、第十九願は一般に考へられた道德であつて煩惱具足の凡夫にはその修行は不可能である。第二十願は諸德の根源たる名號を唱ふることによつて極樂往生を遂げ得ることを誓つた誓願で其の名號を唱ふるものが自分である以上決して純一無雜の自律的唱名では無い。第十八願は阿彌陀佛の絕對救濟の靈力によつて只十念すれば衆生は極樂に往生が出來るといふ誓願で凡夫に相應しい本願ではあるが、抑止文がついてゐて五逆罪と誹謗正法の

罪あるものは本願から除外せられてゐる。

然し翻つて考へて見れば佛出世の本懐は如此き悪逆の機を漏らさず救ひ給ふ爲である（法）。然かも但書通りにそれたば無縁の衆生を冷かに視て差支無いだらうか（機）。此の法と機との矛盾葛藤は如何にして解決せられるか、此の解決法は頗る簡單である。愚禿親鸞といふ一語、又は彌陀の五劫思惟の本願はひとへに親鸞一人が爲なりけりといふて我身ひとりと上人が觀破せられた所に存する。かくして自己の稱名は直ちに彌陀の稱名となり衆生の思ひは其のまゝ彌陀の思惟と合一する所に上人の信念が湧然として起つたのである。之が法と機との矛盾を止揚する唯一の方法である。かくして上人は茲に純粹の大行を媒介とする第十八願に自己の久遠の生命を見出されたのである。

淨土眞宗では以上の三願の外に第十七願を諸佛唱名の願として四願に數へることがある。而して第十七願では佛凡の區別が認められ無い。淨土眞宗の眞實行としては如來の本體が唱名念佛である。西方欣求御恩報謝といふ如き凡夫からの自力的意義は存在せぬ。それは既に普賢の行である。如來の三業と念佛行者の三業と不相捨離の金剛不壞の信念である。不廻向の廻向の行である。然かも其れは主觀的のもので無く大悲心大乘心の菩薩の行願である。

三願轉入むしろ四願轉入の信仰過程はかくして上人の內的苦悶の跡を示す唯一の文獻であるが、之を論理的に説明したのが此の書である。今まで絶對他力不可稱不可思議などの神秘的言語を以て曖昧にせられ勝ちであつた上人の信仰過程をかくも明晰に分解説明した所に著者獨特の、哲學を最高のものとしてその立場より宗教の信仰を批判せられる立場が窺はれる。勿論著者の組織的な思想は「行の哲學」に於て發表せられてゐるが、此の書は殊に淨土眞宗の信仰に關する論文を集めた點に於て日本の思想界、宗教界を啓發し、又幾多の問題を提出すると思はれる。此の意味に於て私は此の書を特に日本の思想界宗教界にお奬めする次第である。

（甲斐實行）（四六版二百二十二頁跋文十八頁、東京本郷六丁目、山喜房發行、定價壹圓五拾錢）